



一体一体、精魂込めて作られています



めんそうふで
面相筆で胴の細いしま模様を描く



均一な厚みになるよう胡粉ごふんをかける



ヒノキの木型に丈夫な手すきの和紙を貼って原型を作り、虎の形にします。和紙が乾いたら、木型からはずして胴と足を貼り付けます。全部で15もの工程を経て一つひとつ丁寧に仕上げていきます。生地作りから完成まで、およそ20日間かけて製作します。

張子虎を作り続ける

はりこのとら

香川の伝統的工芸品

子どもの健やかな成長や家内安全、商売繁盛を願って飾られる張子虎。百有余年の歴史があるこの張子虎を作り続けている伝統工芸士は、県内では三豊市在住の3人だけです。今月は張子虎の伝統工芸士を紹介します。

張子虎づくりは、虎を崇拜する中国からわが国に伝わったといわれています。虎にちなんで、子どもの健やかな成長を祈る気持ちから、端午の節句や八朔祭りの飾り物として、古くから愛用されてきました。ピンと張ったヒゲやゆらゆらと揺れる振り式の首などユーモラスなその姿は、郷土玩具や誕生祝、商売繁盛の縁起物としても喜ばれています。

3人の匠

香川県は高度な技術や技法を保持する人を、それらの維持向上と次世代への継承を目的に、伝統工芸士として認定しています。

香川の伝統的工芸品は37品目、伝統工芸士は115人です。その中で、張子虎の伝統工芸士は真鍋佳則さん(仁尾町)、三宅修さん(仁尾町)、田井艶子さん(三野町)の3人だけです。

手作りの力強さが感じられる工芸品

江戸時代から人形作りが盛んであった仁尾町には、関西方面から多くの人形師が移り住み、いろいろな人形が作られてきました。そうした中から張子虎も作られるようになりました。

張子虎は作る人によって顔・形や色合い、しま模様が違います。まさに手作りの力強さが感じられる工芸品といえます。

今年一年、三豊市の伝統工芸品ともいえる張子虎のイベントを各地で開催し、張子虎はもちろろん三豊市を広くPRしていこうと考えています。

つくってみよう! 張子虎

～田井艶子さんを招いての絵付け教室～
 日時 1月30日(土) 午後1時30分～3時30分
 場所 三野町社会福祉センター
 対象 小・中学生 定員 15人
 参加料 700円
 ▶問い合わせ 三野町図書館 73-3121

とら・トラ・虎 大集合!!

1月9日(土)～11日(月/祝)
 午前10時～午後3時

寅年のスタートにあたり、市民の皆さんの協力を得て集まった張子虎を展示します。伝統工芸士の匠の技と数の迫力があなたを魅了することでしょう。

子どもの健やかな成長・家内安全・商売繁盛を願う張子虎から今年一年の御利益をいただきます。伝統工芸士を招いてのイベントも開催しますので、ぜひ、お越しください。

内容

1月9日(土) 制作実演 三宅 修氏
 10日(日) 張子虎の解説 真鍋佳則氏
 11日(月) 絵付け体験(参加料1,500円) 田井艶子氏

場所 マリンウェーブ

▶問い合わせ 三豊市観光協会 56-9121



絵付け教室に参加して 綾 啓子さん(写真右)
 初めて作ったけど、自分で作った虎は愛着がわきますね。なんとなく自分の顔に似ている感じがして、皆さんも自分だけの虎をぜひ作ってみてください。

見て・聞いて・作って 張子虎イベント



作る人の個性が強くなります

田井 民芸
 田井 艶子 さん (62歳 三野町)

主人の父が張子虎の伝統工芸士で、私はここに嫁いできてすぐに張子虎づくりをするようになりました。明治元年頃創業で、私で5代目になります。
 張子虎は作る人の個性が強くなる工芸品だと思っています。不思議と描いた人の顔に似てくるんですよ。絵付け教室で皆さんに虎を描いてもらうと不思議とその人の顔に似た虎ができるんです。

製作は私と知人の2人でしていますが、今後、考えなくてはいけないのが後継者の問題。娘が後を継いでくれたら一番うれしいんですけどね。
 今後は、ホームページを開設したり広く絵付け教室を開催したりするなど、伝統工芸の普及活動にも取り組む予定です。みんなが民芸品を身近に感じて楽しんで作れる場を提供したいと思っています。



納得のいくものを作りたい

三宅 人形店
 三宅 修 さん (72歳 仁尾町)

張子虎づくりは祖父の代から始めて、私で3代目になり、23歳のときに始めました。
 昔は需要も多く、父と私を含めた6人で作っていましたが、作るのが追いつかないほど忙しかったです。休みがほとんどない時期もありました(笑)
 今は妻と2人で作っています。一度に作るのは八十八体。末広がりで縁起を担いでね。昔のように数はできませんが、ホームページを

出してから京阪神を含め西日本各地の広い範囲で注文をいただくようになりました。昔から買いつけてくれるお得意さんも何軒かあるので、何とか続けられています。大手の卸問屋から大量の注文を頼まれたこともありましたが断りました。実際、2人で作れる数は限られていますし、何より一つひとつ丁寧に納得のいくものを作りたいので、今のスタイルで続けて行きます。



この道一筋60年

真鍋佳則張子虎製造所
 真鍋佳則さん (83歳 仁尾町)

父がしていた張子虎づくりとこんにやくづくりをそのまま引き継ぎ、私は22歳のときに始めました。しかし、父は昔堅気の職人気質だったので、決して作り方を教えてはくれず、自分で見て技を盗むしかありませんでした。昔は忙しかつたので、夜なべをして作ることもよくありました。
 こだわって作っている部分はたくさんありますが、あえて言うの

ならば絵付けです。虎の大きさがかわらず、すべて大阪の筆職人から取り寄せた5寸ほどのハケを使って模様を描きます。味のある線が描けるのですと使い続けています。60年近く虎を描き続けてきたので、一度描きだすと、あとは筆が勝手に描いてくれます(笑)
 一体一心を込めて作った虎なので、皆さんに末長く愛用してもらえたらと思っています。

こだわりの持ち続けることに伝統の重みがある